

## 「パン屋ではおにぎりを売れ 想像以上の答えが見つかる思考法」

著者：柿内尚文

出版：かんき出版

発行：2020年6月22日



最近の書店では、人気順に本を並べたり、よく売れている本や話題の本を平積みしていたり、それらをグルーピングしたブースを設けたりするなど、オンライン書店にはない魅力を打ち出そうと様々な工夫を凝らしている。毎年書評を書くことが決まっていることもあって、書店に行き、どんな本が取り上げられているのか、興味半分仕事半分でチェックしに行っている。今回選んだ本書は、平積みになっており、タイトルが目について購入した本のひとつである。読み始める前、つまりタイトルを見ただけのときは、マーケティングに関する本だと信じて疑っていなかった。この「起業教育」に載せるにはピッタリであると思ったのだが、ページを開いて驚いた。この本は、マーケティングの本ではなく、自己啓発本に近いといえ、考えるとはどういうことか、考える方法について書かれている本である。

本書の著者である柿内尚文氏は、出版社に転職してから長く編集に携わっており、手掛けた本やムックは累計発行部数が1000万部にのぼる。著者いわく、自身には大きな才能がなく、才能によってその実績を得られたのではなく、才能がない代わりに作家に面白いものを書いてもらうために必死に考えたことが実績に繋がっているという。この必死に考えたこと、また考え方、つまり筆者の表現するところの「考える技術」をまとめたのが本書である。

本書は、全5章で構成されている。第1章では、本書を通じたテーマである「考える」とは何かを筆者なりに定義している。第2章と第3章で、「考える技術」について紹介しており、第2章では考える技術を身に付けることの重要性和考えるために必要なことについて丁寧に説明し、第3章では、「考える技術」を詳説している。まず考えるために踏むべき手順を3つのステップに分解し、さらに「考える技術」について、考えを広げる方法と深める方法に分け、それぞれ6つの具体的な手法を紹介している。第4章では、考えるために作成する思考ノートの重要性を説き、その作成方法を紹介してい

る。第5章では、「考える技術」をさらに磨くための方法として、考える時間、考える練習、考える場所を作ること、習慣化することを主張している。

本書で紹介している「考える技術」は考えるというプロセスをとってもきれいに体系化していて、非常にわかりやすい。考えるとはどういうことか、つまり考えるとは何をすることなのかの定義で、考えを広めることと深めることであるとしている。これを例になぞって解説しており、非常に納得させられる。これ以上はネタバレとなってしまう、ここではあまり詳細に紹介しないが、考えるための手順を分解し、それぞれの手順でどのような作業が必要なのかについても、改めて自分の思考方法を見直すきっかけとなってくれた。また、具体的な考える技術についても例示しながら、端的にわかりやすく解説してくれており、非常に役に立つ内容となっている。

また、本書は著者の持つ考える技術を紹介したものであるが、この考える技術がどのようにできてきたのか、そのいきさつが所々に語られていて、これもまた面白い。著者の編集者としての経験、特に編集として携わった経営者やスポーツ選手、文化人などから得た考え方や、そういった方々との会話などが非常に興味深い。著者自らの持つ考える技術を理論的に補強してみたり、修正することになってみたりと、考える技術もまた進化していることがうかがえる。著者は、本書を発行してから1年と半年後に、「バナナの魅力を100文字で伝えてください 誰でも身につく36の伝わる法則」を執筆している。こちらは伝える力をテーマとしているが、考えて伝えるというコミュニケーション、とりわけビジネスシーンで必要となるコミュニケーションの根幹を体系立てて解説してくれている。こちらの図書については、昨年度発行した「起業教育⑭」に書評が載っているのので、そちらを参考にされたい。

本著は、著者の編集者としての様々な経験に基づいて書かれており、考えることのプロセスを再認識できるだけでなく、具体的なスキルも紹介されているので、すぐにでも役立てることができる。ビジネスで新規事業を考えなければならない方、現状を打破するための解決策を提示しなければならない方、このようなビジネスシーン限らず、授業の課題でどこから手を付けてよいかわからなくなっている学生など、課題発見力や課題解決力を必要とされている方には、ぜひ手に取っていただきたい良著である。

起業教育研究会 企画委員  
大阪商業大学 准教授  
北室 康一